

晩年の高山樗牛を懐ふ：論説

著者	前田，非石
雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 5 8
ページ	2 7 - 3 3
発行年	1915-06-20
その他の言語のタイトル	晩年の高山樗牛を懐う：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/6487

んとする努力である。ワイルドの頹蕩生活や、自然主義の科學萬能の迷の如く、限りある直接經驗にのみならず、目の前の人生、現實界の人生より更にすつと深く、その奥底に潜める眞の美や、眞に觸れんとする、最も意義ある傾向への轉化であつたのである。此れを眞に偉大なる思想、文藝の生れ出づべき時代である。然るに、漸くこの尊嚴なる轉化に遭會し將に新らしき飛躍をなさんどせしオスカー・ワイルド、不幸にして、永き過去の溺惑、乱醉の生活は彼をして再び光明を體現して世界の幸福の増進に資せしめずかくも煩悶の中に狂ひ死さすべく運命づけてしまつた。吾人は今、善とか惡とかの標語を以て彼を批評するに忍びぬ、たゞ、この不遇なる天才の一生を追憶し、溶鐵の如き一掬の熱涙をそぐいで彼の新時代の轉機の上に屯ろしたる位置の意義を認めてやり且つはその偉大のために讃歌を捧げねばならぬ。

(五月十日深更稿)

晩年の高山樗牛を懷ふ

一部二年 前 田 非 石

湖南の地より龍華寺の塔へと思を馳すれば樗牛生涯の歴史は髣髴として表はれ来る。世に樗牛を云ふ者甲となく乙と云はす其數少きに非ず。然もよく一樗牛を知る者に至つては頗る稀なり。或は其の文章に私淑し、或は其の短命を憫む者、自ら傲語して曰く「吾は樗牛崇拜家也」と。思はざるも甚だしと云ふ可し。樗牛は生涯を通じて、文章の友に非ず。其の文は文にして文に非ず。樗牛の生命也。吾人は之を讀んで飽かぬ精靈の響を聞き、之を味つて樗牛の運命に觸るゝを得。然るに今や樗牛を慕ふ者、多くは其心打算に在り。彼を罵詈する者も多くは嫉妬より然り。吁々かくの如きは樗牛を毒するの甚だしきに非るか。

彼が年齒二十有一にして、仙臺高等中學に在學するや、詩人肌、感情的の氣分は、遺憾なく顯はれ、此時既にウラーツウヲース。シルレル。バイロン。キーツ。デニソン。ブラウニング等の書の大率ね讀破して、以つて天才の名を勝ち得たるは、人の善く知れる所ならん。其の高等中學より大學に至る數年の、花々しき思想の内容は、吾人をして一種異様の感興を起さしむべく充分なれども、吾人は題に掲げたるが如く、樗牛の全生涯を批判考究する者に非ず。只其の晩年の彼を回顧せんと欲する者なれば、徒に中途花を眺めて、日暮道遠の歎に悲泣するを望まざるなり。

然れども、吾人は其の前に聊か杞憂なき能はず。世論俗評彼を論じ彼を語る者、或は語をなして曰く、彼は節操の士に非ず。其の主義に於て始めは甲に走り、終りに乙に走る。又曰く彼は極端より極端に渡つて、其才を弄びし者なりと。迂拙者も茲に至りては寧ろ滑稽に屬す。無節漢と稱せらるゝも、變節士と嘲らるゝも、樗牛は至つて冷然たり。何となれば彼の爲す所には必ず、かくなさんとする意志の力のありて存すればなり。換言すれば彼の變轉には常に自我の活動あり。自我の伴はざる活動は道德的劣等價値の行動に非ずや。自我的行動と稱する場合には、凡て此の自我感と努力との結合を必要條件とすべし。かるが故に樗牛の行動は常に自覺的なりき。徒に曲學阿世、八方美人主義の優柔不斷なる態度に非るを信じて疑はず。——萍や明日は向ふの岸につき——人に諷ひ世にたもねり、單なる名利と打算とに拘々焉たる多くの現代人は、畢竟偽りの奴隸に非ずや。而して之を藏する現代は、遂に偽りの時代に非ずや。

彼が詩人の環境に憧憬し、哲人の榮光を讚美し、藝術の美感に惑溺して、或はバイロンを云ひ、或はニイチニを稱し、或はハイネに、或はエルテルに羨望心醉せしと雖も、畢竟する所は、自己の安住地を彼等を通し

て發見せんとしたるに過ぎず。一葉女史に同情し、市川新藏を歎美したるも、之を通して彼の靈に慰安を與へんとせしに過ぎざるのみ。宜なる哉、彼れ傲語して曰く「人生は事實也空理に非る也。漫に主義を標榜し學説を糊塗す、畢竟何の關する所ぞ。道學先生好んで理を談ず。疑ふらくは中心果して信する所ありて然る乎」と。狂はんかとすれど、狂ふ可くもあらず。戀と死と狂とに、人生を悶へし哲人の最後は、遂に奈何の頁ぞや。何物かを求めんとして求めねざりし哲人の悲は、其の斷末魔に望んで果して涙を以て彩られたるか。

樗牛の晩年より最期に至る短少の生涯は、彼の思ひ出中、最も力ある最も美はしき又最も大なる追憶なり。悲劇にあらず涙に非ず。光明なり。歡喜なり。寧ろ地の花となつて泥に混せんより、天の星となつて輝けるものなり。求め求めて惑倒したる時に於て、田中智學氏寄贈の宗門の維新の一小冊は、彼のために絶大の力なりき。

日蓮崇拜茲によりて起る。晩年の樗牛とは、日蓮主義者としての樗牛を語るもの乎——然り。「今の世の風俗にあきたるもの、願はくば此の篇を讀め。日本は如何に墮落すとも吾人は其の同胞に日蓮上人を有することを忘るゝ勿れ。彼の追懷は力也信念也。若し學究先生の諸説を聞くの余暇あらば、吾人と共に此一大偉人を研究せざる可からず」。(全集四卷八八九頁)と斷言壯語せし相貌を懷へば、彼が信念と力とを日蓮によりて得且つ之を如何計り体得したるかを思ふに苦しまざる可し。又曰く「予を信せよ。日蓮は予の知れる日本人中の最大偉人也。予は和氣清麿、楠正成乃至豊臣秀吉を生じたる日本を、左迄大なりとは思はざれども、日蓮を生じたる國土は、實に生れ甲斐ある國土なるを思ふ。吾人の祖先の中に日蓮の如き人物を有する事は、吾

人が世界萬邦に誇稱すべき所也。」と云ふ。主義のため信念のため如何に強者の態度を持したるしかを念ふ可き也。

此の變遷此の推移は、徒らに彼が讒諂面諛の人たるを證するものに非ず。徒らに變節痴漢を表現するものに非ずして、寧ろ人生の暗路に一條の光明を與へ、滿天の晦冥に、空中の燐火となつて煌々たるものなり。之れ實に吾人の針路を教ふるものに非ずや。然り而して世の彼を容れざるを笑ふに至つては共に談するに足らざる痴漢の業のみ。吁奈何ぞ片々たる道學先生のよく此の天才を窺ふをわんや。彼曰く、「唯々同じき者のみ同じき者を解す。道學先生の解し得る人物は、道學先生自らに過ぎざるのみ。」と。

人樗牛を見るに其の眼識自ら異れり。或は文章の人として、或は性格の人として、或は自由思想家として、或は天才歎美者として、或は文藝評論家として、或は信念の人として、曰く何曰く何と其の數に堪わざれども、畢竟する所は、彼の天才的なるを否定せざるものと如し。今予は彼を見るに信念の人として其の一斑を窺ふのみ。讀者の誤解なからん事を――

○信念の人樗牛

A 樗牛の創造生活

オイケンやベルグゾンの主張する創造本位の生活は、了解すべく余りに浩瀚にして余りに複雑なり。思ふに超人思想なるものは實に近代思想の根柢をなせるが如し。「神は死んだ」とニイチエが叫びし時其處に、近代思想は初めて雄々しき産聲を發し、フリードリッヒ、ニイチエ之によりて生き、オスカー、ワイルド之によりて立ちぬ。一方フイフヒテ以來盛に唱導せられたる、自我實現の思想は、デカルトによりカントを経て毎

る可からざる一大思想となりてオスカー、ワイルドまた此れによりて立ちぬ。オスカー、ワイルドの創造生活は、正に此の超人思想と、かれの自我思想との合致爛熟せる結果に外ならず、予はベルグゾンの創造生活よりも、ワイルドの夫に多く共鳴するものなり。彼に従へば天才即藝術家なる、自由思想と天才即超なる超人思想との合致して生じたる創造の生活なり。彼にワイルドありて我に樗牛を有す。あはれ予の如き幸福の子ありや否や。

樗牛の創造生活は彼の根本性格に基きし意志生活の餘迸たる、美的生活論に於て認め得となす。人生本然の要求の満足せられたる所、其處には乞食の生活にも帝王の羨む可き樂地ありて存すと叫びし彼の衷心には、本能の主張され實現さるゝ所、其處に美の創造あり力の創造あり信念の創造ありとなしぬ。彼の日蓮崇拜の信念は、蓋し此の美的生活論より一轉したる意志生活の餘迸たる事を思はざる可からず。

B 樗牛と日蓮

今の世の凡俗は嫉妬偏見ただならず。或は曰く、彼の日蓮を知るは、晩終の一ケ年に過ぎず。何ぞ余生の多きに比せん哉」と蓋し、或は然らむ。されど其語や嫌惡嫉妬の偏見に非ずんば幸也。或は彼は病魔のために之を信せしにすぎず。或は自家の見地より猥りに聖祖を私斷したり等、俗評續々として顧るに違あらざるの觀あれども、かゝる事は樗牛に何の關する所かある。又道學先生の容易に輕言すべき事にも非ず。樗牛は久遠に於て、日蓮に冥合する所あり。日蓮の文を讀んで、文字以外の大精神を看破し、言語以外の大真理に觸る。徹頭徹尾、彼の崇拜は、漫然たるものに非ずして、日蓮の精神に對する感應の響なりき。愚よ、狂よと嘗られつゝ、言はんと欲する所を言ふに憚らず。先天付屬の爲すべき事をなして臆せざるは、正に曠古の偉

傑に非ざるか。彼は公に日蓮狂を以て是認す。何ぞ片々擾々の嘲笑をや。

彼の思想は其の生涯に於て、比類稀なる程の變遷を見たりしものなり。然れども其の純感と清情より迸る眞の信念は、只晩終一ケ年の夫なりき。或は憧憬の人として、或は懷疑の人として或は煩悶の人として、或は欽求の人として、或は渴仰の人として、其の精靈に泉の響をきかんとせし事茲に幾度ぞや。之を近松に求め之を基督に求め、之をホイットロンに求め、之をバイヨン、ハイネに求め、而して遂に日蓮に求めしなり。彼の日蓮に來るや、蓋し偶然に非る也。天は此の天才を見捨てず。あらゆる煩悶に懷疑に憧憬に、全生命を捧けて、心靈に光明を翹望せし熱情は、獨り日蓮に來らざるは解決し能ふ所に非りし也。あはれ彼は日蓮によりて、飽かぬ精靈の響を聞き、其の憧憬の中の的を射落しぬ。比語豈に予輩の言なるのみならんや。「等しきものゝみよく等しき者を解す」とは之れ彼が日蓮に對する衝動感字の一語也。傳教が七舌の鍵を懷にして、天臺祕密の經藏を開きしが如く、樗牛の胸中欽求の鍵は、日蓮の寶藏に到つて開扉の喜を告げし也。世に樗牛の日蓮崇拜を以て、只最後の一ケ年にすぎず。尙余生幾何もあらんには、其の思想の變遷、推して知る可きのみといふ者あり。然れども、乞ふ、人よ安んぜよ。

彼は單なる文學者にもあらず。宗教家にもあらず。藝術家にも非ず。評論家にも非ずして大日蓮主義の喧傳者なりき。吾人多く言ふを欲せず。人よ、三更窓前に机を寄せて、彼が最後晩終血書の一文を讀まば幸也。大宗宗家としての日蓮を見、性格の人としての日蓮を見、玄人としての日蓮を見たる高山樗牛の晩終は正に力の創造を以て終れるが如し。彼を評するもの冷靜にして、徒らに其の色彩を評することなくして、彼の大精神を評するに勤めねば以て、無上の満足を見ん。吁々蒼天極りなくんば玄鑑あれ。黄土盡くるなくんば照

知あれ。人は須らく現代を超越せざる可からず。樗牛に至つては正に此語の色讀者なるを！あはれ悠々として江山の翠誰がために永へなる。條々として長江の水誰がために盡きざるか。願はくば彼に譲るに其の細片を以てせよ。吾人は彼に於て力強き信念の叫を聞くを得れば也。實相鋤に曰く

「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩に定まりなば釋尊の弟子たる事豈に疑はんや」と
と此の一言こそ彼日蓮が本地妙悟の居住を証したるの明文也。彼樗牛も亦此處に生き、此處に醒め、久遠永却の生命に感觸する人となり畢はんぬ。吁々亦何等の光榮ぞや。

(四月廿日稿)

女皇クレオパトラ

一部二年乙

柳田加藤次

見渡す限り渺漭と

底の千仞今荒れて

眠りも戀も醒め果てぬ

五彩彩る晨樓の

燃ゆる夕日の紅染めて

痕も流轉の泡沫や

タウタカ

次第に籠むる霧の海。

ローマの光榮を宣る如く、

終焉の幕今近し。

緑を溶かすわたつ海の

夢安らげき白鳥の

見よ大空の薄霞

裝ひ天の一方に

崩れて波に入りし痕

漣瀾は眠る花に似て

あゝ、アケチエウム暮の色。

沈む夕日のエザプトの